

## 「屋根がある人たち」における現代的課題

地下鉄 A 駅バスターミナルのベンチに、荷物をたくさん持った高齢女性が日中ずっと座っているという、支援者からの連絡を受け、急ぎ、A 駅に向かう。しばらくバスターミナル近辺を見回り、本人と思われる方を見つけ、しばらく話を聞き、今後の相談に乗る。以下、会話の内容。プライバシーに関わることについては個人が特定されないよう○で表記する。

「こんにちは、仙台夜まわりグループの○と申します。突然で大変失礼します。何か困っていることがあればお手伝いできないかと思い、お声をかけさせていただきました。差し支えなければ、お名前を教えてくださいませんか？」

「○といます。」

「失礼ですが、今おいくつですか？」

「○才です。」

「○さんは、ここにずっとおられるのですか？」

「日中は図書館にいるか、ここに座っているかのどちらかです。」

「お家やアパートのお部屋はあるのですか？」

「○区にアパートの部屋があります。」

「お部屋にはおられずここにいるということですか？」

「そうです。どうしても帰ることができない理由があるのです。」

「その理由を教えてくださいませんか？」

「○や○から電磁波攻撃を受け、部屋には戻れない状態です。」

「○や○が、○さんを狙って攻撃をしているということですか？」

「そうです。」

「失礼ですが、○さんは収入がおありですか？」

「年金を貰っています。家賃は毎月納めていますが部屋に帰れないのです。」

「○さんは、これからどうしたいと思っていますか？」

「○や○の攻撃を止めてほしい。警察が解決してくれるのを望んでいます。」

「○や○の電磁波攻撃が止んだら、○さんはお部屋に戻るつもりはありますか？」

「あります。」

別れ際に、食糧や支援スケジュールを手渡し、「くれぐれも体にご留意ください。また会いに来ても良いですか?」、「はい、良いです。」という会話を交わし、辞す。「○や○の陰謀」、「電磁波攻撃」という発言から、彼女は、精神疾患を患っている可能性もあるが、病識がないように感じられた。が、受診し然るべき治療を受ければ回復の可能性が十分あるように察する。居所があるなしに関わらず、このような問題を抱え、街を彷徨う方々が少なからずおられる。

近年、住まいがない方々(ホームレス状態の方々)への支援施策は、行政、民間問わず手厚くなりつつあるが、彼女のように、部屋がある方々への支援(特に精神疾患を患っていると思われる方への対応)は、手付かずのまま放置されているように感じられる。独居高齢者のみならず、地域から孤立し、経済的・身体的・精神的問題を抱え、呻吟している方々に、誰が、どのような仕方で支援していくのが、現代社会における喫緊の課題であり、根源的には、行政が責任を持って施策を構築し、実施せねばならないと考える。